

## 幼児の対人葛藤場面の描画課題における対処方略に関する発達研究

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
荒木久理子

本研究は、描画課題を用いた仮想実験において、幼児の反応を分析することで対人葛藤場面の対処の認知発達の過程を検討するため、以下の仮説を立てて分析を行った。一つ目は、葛藤場面の理解は年齢と共に理解が進み、相手に対して何らかの働きかけを行う反応が増加する。二つ目は、葛藤場面における対処は年齢と共に言語的な対処が多くなる。また、5歳児は条件の影響を受けず言語的な対処が多くなる。三つ目は、対処の結果に着目すると、5歳児は葛藤場面を構成している両者の要求を通す協調的な対処が多くなる。

実験は、対人葛藤の描画図版を用いて全6試行を3-5歳児(54名)に行った。試行は、相手の発話によって場面が構成され相手の意図が明示的でない「言語条件」と相手の行動によって場面が構成され相手の要求が明示的でない「行動条件」を設定した。また、各条件に1試行ずつ「対等場面」を、2試行ずつ「自己先占場面」を組み合わせている。

その結果、年齢と共に葛藤場面への理解が確立し、相手に対して何らかの働きかけを行う反応が増加することが明らかになった。また、葛藤場面における対処は年齢と共に言語的な対処が多くなり、3歳児は「言語条件」において働きかけが増加し、特に行動による対処が増加する。5歳児は、条件に関わりなく言語による対処が一般化することが明らかになった。また、協調的な対処が出現し始め、それは「対等場面」で促進された。一方、4歳児において、葛藤の理解は確立したものになるが、「先占の尊重」が作用せず、「対等場面」においては「行動条件」であれば3歳児に比べて反応が低下する。また、言語による対処は、「対等場面」において「言語条件」3歳児に比べて少なくなる結果となった。このように、4歳児の低下が「行動条件」で目立つ一方で葛藤の理解は「行動条件」の4歳児における低下傾向は縮小する。しかし、「先占の尊重」が介在する場合には、4歳児の反応の低下・抑制の傾向が出現することが明らかになった。

このことから、年齢と共に葛藤場面の理解が進むことで具体的な方略をとるようになり言語による対処は増加するのであるが、4歳児において、葛藤場面の理解や対処方略に見られる変化が何らかの発達機制の変化を反映している可能性が示唆された。